

■自由投稿

「認知症にならないためには？ 一父の場合」

山 寄 麻里子 (20期)



年齢を重ねてくると、認知症が気になる人が多いのか「呆けない方法」とか「認知症にならないためには」といった類の本や記事をよく目にする。先日も、友人が「呆けないためには『①よくお喋りをする。②お金の管理をきちんとする。③異性に興味をもつ。』この3つが大切だと聞いた」と話していた。

でも、一概にそうと言えるだろうか？ 102歳で亡くなった父は、年齢の割りに頭がしっかりしていたが、巷で言われているようなことには当てはまらない人だった。口下手で、人とコミュニケーションをとるのが苦手。一人でいるのが好きな人だった。でも、改めて父を思い返してみると、思い当たることが幾つかある。

一つは旺盛な知識欲。活字が大好きで本の虫。とにかく、本ばかり読んでいた。あらゆるジャンルの本を読み、父に聞いても知らないことはないほどだった。生前、「わしから本を取ったら『死ぬ』ということと同じだ。」と話していた。100歳前後から、入退院を繰り返していたが、活字が恋しかろうと病院内で新聞の配達を頼んだ。「100歳になっても、ベッドで新聞を読んでいる木村さん(父の名前)を見て驚いた。」と主治医が後々語っていた。

二つ目は飽くなき好奇心。運転免許は17歳のときに取得。今から90年近く前の話で、当時運転免許証を持っている人はほとんどいなかったと聞く。私達子どもが生まれてからは、カメラにはまり、押し入れに暗室を作り私達の写真を現像していた。ワープロにも、いち早く飛びつき、文字や手紙はワープロで打っていた。

語学に関心をもち、満鉄にいた頃はロシア語の通訳みたいなことをしていたらしい。帰国してからも、コツコツと机に向かって勉強していたのを覚えている。そのうちに「もう、ロシア語は卒業した。」と英語に切り替え、家庭教師を頼んで勉強していたが、話すのを聞いたことがないので、はてさてどこまでの実力だったのか。

母が危篤のときはずっと付き添っていたが、そのときも本を手にしていて。題名は『気象予報士になるためには』。「エーッ、お父さん、何でこの本を読んでいるの？」と聞いたら、「気象予報士になりたいのうと思って。」と宣もうた。父95歳のときである。

三つ目は人間愛。人付き合いは悪いが、穏やかでユーモアのある人だった。いつも、口にするのは「有難う。」という感謝の言葉。

泣き言や愚痴は言わなかった。病院に入院すると、看護師さん達が「木村さんが来た！お帰りなさい！」と手を叩き、退院すると施設の人達が「お帰りなさい！」と喜んだ。昔は、短気であり喋らない父を敬遠していたが、どこで変身したのだろうか？ 父は、いつの間にかアイドルになっていた。

私は、顔も性格も父とは全然違うと思っていたが、最近何となく父に似てきたと感じるようになってきた。だとしたら、私も晩年まで頭がクリアかも。父がいつも本を入れて持ち歩いていたショルダーバッグを撫でながら、そんなことを考えている。